

個性豊かな子どもを育てる学級づくり

金 舛 俊 乍

A Classroom Management educating a children
with a great deal Individuality

Syunsaku KANEMASU

1. はじめに

子ども達一人ひとりには実に個性豊かな存在である。このことは、現場の教師ならずとも誰もが認めるところである。

それなのに、最近の教育現場で「生徒一人ひとりの個性を生かし、伸ばす教育」の重要性がこれほど話題になり問われるようになったのは何故であるか。言うまでもなく、その発端は、臨時教育審議会が第一次答申（昭和60年6月26日）で「個性重視の原則」を教育改革の基本的な原則として位置づけたことによるものである。

この原則にかかわって指摘された基本的な方向は、「自他の個性を知り、自他の個性を尊重し、自他の個性を生かす教育」の重要性である。

この指摘された基本的方向をどのように解釈したらよいか。この指摘には、およそ、次の2つの理由が考えられる。

1つは、これまでの学校教育の反省の上に立っての解釈である。これまでの一斉・画一的な教育、知識偏重の教育では、子ども一人ひとりのよさ、子ども一人ひとりの持ち味が生かされないということへの指摘である。

言い換えれば、一人ひとりの個性を生かす教育の大切さを口では唱えながらも、実際は没個

性の教育を進めていることへの反省である。

他の1つは、急速に発展、変化している現実の国際社会、情報化社会へ対応して、これからの学校教育のあるべき姿を志向しての解釈である。これは、生涯学習の視点から、今の学校教育がどのようにあればよいかを原点に立ち返って問い直し、その上で、一人ひとりの個性を開発し、たくましく生きぬく人間をどのように育てたらよいかという積極的な面からの解釈である。

本稿では、この2つの解釈をふまえながら、「個性豊かな児童、生徒を育てる学級づくり」はどうあればよいか、その条件を探ろうとするものである。

2. 子ども達の期待する学級

(1) 調査結果から

個性豊かな学級づくりを進めるにあたって、子ども達はいったいどのような学級を期待しているのだろうか。子ども達一人ひとりの学級に対する願いを知るために調査を実施した。

調査内容は望ましい学級と考えられる次の10項目を選び、

○心のよりどころとなる学級

- 一人ひとりの個性を大切にする学級
- 誰もがリーダーになれる学級
- 自由で多様な考えが出せる学級
- 失敗を認め、解決できる学級
- いつも真剣に授業に参加する学級
- 協力し、助け合える学級
- ☞ ○厳しさと思いやりをもった学級
- 人権を大切にする学級
- 自主的に行動できる学級

この中から、自分の期待する学級はどの項目であるかを問わせ、3項目を選ばせた。

次に示すのは、調査結果を頻度の高い順にグラフにまとめたものである。(調査対象；A中学校2年生、男子22名、女子21名)

期待する学級	回答した生徒の割合(%)
いつも真剣に授業に参加する学級	(22%)
一人ひとりの個性を大切に する学級	(19%)
自由で多様な考えが出 せる学級	(15%)
自主的に行動できる学 級	(13%)
厳しさと思いやりをも った学級	(7%)
心のよりどころとなる 学級	(7%)
人権を大切に する学級	(6%)
誰もがリーダーになれ る学級	(4%)
協力し、助け合える学 級	(4%)
失敗を認め、解決でき る学級	(3%)

この結果をみると、「いつも真剣に授業に参加する学級」が一番目にランクされている。調査対象が中学2年生ということを見ると、う

なづける結果であろう。

そして、2番目が「一人ひとりの個性を大切に
する学級」、3番目が「自由で多様な考えが
出せる学級」、4番目が「自主的に行動できる
学級」、……となっており、「個性」にかかわる
項目が上位を占めていることがわかる。

つまり、この調査結果から判断しても、子ど
も達は、個性が生かせる学級、自由に自分の考
えを述べたり、行動できる学級を望んでいるこ
とがわかる。

(2) 個性とは何か

調査結果を見てもわかるように、確かに、子
ども達は個性の発揮できる学級、自分らしさを
思う存分発揮できる学級を期待している。

さて、ここで、「個性とは何であるか」、明ら
かにしておく必要がある。「個性」たるものの
正体を共通理解せずして、個性を生かす学級づ
くりを志向するには問題があるからである。

「個性とは何か」について梶田叡一氏は明解
な解答を示唆してくれている。氏は⁽¹⁾
……「真の個性とは、けっして外見上のこと
ではない。おとなしく目立たない人の中にも、真
に個性的な人がいないわけではない。個性とは、
究極的には一人ひとりの内面世界に関わるも
のである。つまり、その人の実感と納得と本音の
世界、その人なりの見方、考え方、感じ方の世
界に関わるものなのである」……と。

私達は、「個性」というと、直接眼に見える
外見的なもの、髪型や服装などによって、人
とはちがうものとしてとらえることが多い。しか
し、「真の個性」とは、氏の述べられているよ
うに、一人ひとりの内面世界にかかわるものな
のである。

したがって、個性を生かす教育とは、決して
他人とちがった子どもを育てることではなく、

他者（自分をとりまく集団）と深くかかわりあいつながら、自分らしさ、自分の持ち味を發揮できる子どもを育てることなのである。

つまり、個性を生かす教育とは、子ども達一人ひとりの実感と納得と本音（情意）を大切に、それをあらゆる教育活動の中で生かす教育を進めることであり、仲間と協働しあいつながら見方、考え方を深め、広めていく教育活動なのである。

3. 個性を生かす学級づくり・その視点

それでは、学級担任の立場として、一人ひとりの子どもの個性を生かす学級づくりを進めるにあたって、どのような指導が必要であるか、本稿の主題にせまってみたい。

私は、次に示す4つの柱を個性を生かす学級づくりの大切な視点と考えている。

- (1) 子ども一人ひとりに自己表現する力を育て、自己表現することの大切さを学ばせること。
- (2) 学級、班、および個人の目標をつねに意識させ、目標を実行にうつすべく努力をさせること。
- (3) 学校、学級の諸行事に積極的に参加させ、自分らしさ、自分の持ち味を發揮させること。
- (4) お互いが信頼しあえる学級、心のよりどころとなる学級を日常活動の中で育てること。

以下、この4つの柱にもとづいて、私のささやかな実践を交えながら学級づくりの視点を述べてみたい。

(1) 自己表現活動を生かし、自己表現することの大切さを学ばせる。

○自己表現活動を通して心を開かせる
道を歩いていて、知人に出会ったら会釈し、言葉を交わす。美しい音楽が流れていたら、静かに耳を傾ける。友達がスポーツをしていたら、自分も一緒に身体を動かしたいと考える。……これらの行為は人間なら誰も感じる、ごく自然な行動・欲求であり、気軽に行動を起こす人は多い。これらの行為はすべて自己表現活動である。

自己表現活動とは、自己の内面に存在する考えや感情を自らの体験にしたがって、自由に、しかも主体的に表現することを通して、個性を伸ばし、創造性を伸ばす活動である。⁽²⁾

子ども達一人ひとりに潜在している自己表現活動を積極的に促し、それを指導に生かしたいものである。

自己表現の手段としては、

- 表情や身振りや動作などによる身体的な自己表現。
- 言葉や文字、記号などによる言語的な自己表現。
- 音、映像や絵、写真などによる聴視覚的な自己表現。

の3つが考えられる。

もちろん、これら3つの自己表現の手段はそれぞれ長所・短所を持っており独立して表現されるものでもない。子どもの性格をふまえ、しかも、目的や必要に応じて流動的に使い、生かす工夫が必要である。

最近の子どもは表現力が乏しいと言われる。自分の思っていること、考えていることが素直に表現しきれない子どもが年齢がふえるとともに多くなっていると言われる。

自己表現活動をあらゆる場で促し、生かした

いものである。自己表現活動を活発にさせることは、子ども達の心を開かせることであり、個性の開発なのである。

○自己存在証明の場としての授業づくりを
授業中の子ども一人ひとりをじっくり観察していると、さまざまな光景を眼にする。

「先生、わかったよ。簡単だ。」

と大きな声で、精いっぱい手をあげて指名を待つ子ども。

「あれ、おかしいな。どこをまちがえているのだろう。」

と、うつむき必死に考えこんでいる子ども。

「うん、うん。なるほど……。」

と友達の説明にうなづいている子ども。

「やーめた。わからん。」

とあきらめ、ほおづえをついてぼんやりしている子ども。

これらの発言・つぶやきは、いつも、眼にすることができる授業中の光景であり、誰もが体験する自然な行動である。

授業は、分からないから学ぶのである。できないから、できるようになるために努力するのである。

「やーめた。わからん。」という子どものつぶやきは、彼にとって最大の自己表現活動である。こういう子どものつぶやきを意識的に取りあげ、生かす取り組みは、自分も学級の一員であるという自覚を高めることはもちろんであるが、学級成員の確かな分かり方へつながっていくものである。

分からない、できない子どもの自己表現活動を指導の基底において、子ども一人ひとりの存在意義を認めた授業づくりを心がけたいものである。何故ならば子どもにとって、授業は自己存在証明の場なのだからである。

(2) 常に目標を意識させ、目標を実行にうつすべく努力をさせる。

○目標は実行にうつせるものを

個性豊かな子どもは、毎日の生活が生き生きとしており、充実感にあふれている。それは具体的な目標を持っており、しかも、目標に到達すべく努力を惜しまないからである。

さて、担任の学級に目を向けてみよう。学年始めに苦勞して考え、設定した「学級目標」はどのように生かされているだろうか。「班目標」はどうだろうか。教室の飾りのみになって、ほこりをかぶっていやしないだろうか。子ども達は、目標を意識して生活しているだろうか。

学級目標や班目標は学級づくりの基盤として、生きて働いてこそ、その価値があるのである。例えば、毎朝のホームルームで、日直の指示のもとに、学級目標

一、あいさつをきちんとし、礼儀正しい生活をしよう。

一、友だちの気持ちを考えて行動しよう。

一、授業に積極的に参加し、自ら進んで学習に励もう。

を全員で唱和してみたらどうだろうか。学級目標が単なる目標でなく、目標と自分とのかかわりが明確になり、実行にうつすべく身近な存在になってくるはずである。

また、年間目標だけでなく、月間目標あるいは週目標などを設定することも大切である。例えば、学級に、話し方聞き方のしつけが必要な場合は、次のような「話し方」「聞き方」の留意事項を掲示し、

— こんな話し方をしよう —

- 一、はっきり口をあけて、大きな声で話そう。
- 一、友だちの顔を見て、皆んなにわかるように話そう。
- 一、友だちの話に、かかわらせて話そう。
- 一、よく考えてから、ゆっくり話そう。
- 一、考えの筋道を立てて、よくまとめて話そう。

— こんな聞き方をしよう —

- 一、誰の話でも、最後までじっくり聞こう。
- 一、自分の考えと、比較しながら聞こう。
- 一、大切なことは、メモやノートしながら聞こう。
- 一、「何が言いたいのかな」と考えて聞こう。
- 一、背すじを伸ばして、相手をよく見て聞こう。

ホームルームの時間、あるいは授業開始前に唱和したり、黙読させることも1つの方法である。個性が発揮できる学級の雰囲気づくりとともに学習の成果も期待できるのではないだろうか。

○個人の目標も大切にし、生かす。

どこの教室をのぞいても、学級目標や班目標は皆んなの目につく場所に掲示してある。しかし、子ども達一人ひとりの目標＝「個人目標」は、どのようになっているのだろうか。

学級目標や班目標をより具現化していくためにも、また、個々の子どもに目的意識をもって生活を送らせていくためにも、個人の目標も大切にし、生かしたいものである。

例えば、次のような今月の一言決意＝「個人

目標」なども掲示してみたらどうであろうか。

○月の一言決意

(自分の考え)「授業の内容はできるだけ、その時間内に解決する。」は授業中の集中力がついたらいいか、完全とまではいかないけど、だいたい守れた。今月は、授業を活発にするためと、自分なりの意見を持つために、一時間に一回は挙手するようにしたい。

((結論))一時間に一回は、必ず発言する。

学級の仲間が、いったいどのような目標を持って生活しているのか、それを知るだけでも効果が期待できるのである。

最近の子どもは、指示されなくては行動できない、いわゆる「指示待ち人間」が多い。個人の目標を持たせ、今、自分は何を為すべきかを考え、しかも、行動にうつせる子どもを育てたいものである。目標を達成した時には、誰にも言いたい喜びを感じるものである。こきざみで、しかも実行可能な目標を指導したいものである。

(3) 諸行事や諸活動に積極的に取り組ませ、自分のよさを見つせさせる。

○諸活動の中で、個性の発揮を

一年間を振り返ってみると、学校にはさまざまな行事が数多くあることに気づく。

中学校の場合を例にとると、生徒会にかかわる行事だけをあげてみても、体育的行事としてのバレーボール大会、バスケットボール大会、駅伝大会、……また、文化的行事としての、合唱コンクール、文化祭、三年生を送る会、……などなどである。

このような行事では、教室の中では目にする

ことのできない子どもの姿に出会う。子ども達一人ひとり心を開放し、実に生き生きと活動する。これらの行事の中で、知らず知らずのうちに、友だちのよさを見つけ、さらには、自分のよさにも気づいていくのである。

学級の子ども一人ひとりをこれら諸行事の一つ一つに、いかに意図的に、しかも主体的に取り組ませていくかは、学級を活性化させるための絶好の機会なのである。と同時に子ども、一人ひとりが平素は見られない個性が発揮できる絶好の場なのである。

校内の諸行事・諸活動に積極的に取り組ませ一人ひとりが活躍できる場を組織したいものである。

○誰もが何かのリーダーになれるように

子ども一人ひとりが諸行事・諸活動の中で何らかの役割を分担し、その責任を果たしていくことは、集団の中で役に立つ喜びを得るために大切なことである。

ところが、ある子どもはいつもリーダーであり、反対にある子どもはいつもフォロアーという役割が固定していたのでは新鮮な喜びはなくなってしまいます。いわんや、諸行事・諸活動に取り組む姿勢は消極的になってしまい、行事の価値は半減してしまうというものである。

そこで、絶えず役割を交代し、どの子どもにも出番があるような多様な活動の場を組織する必要がある。

例えば、行事での役割を決める際、「この子どもならできる」とか「この子どもはできないのではないか」とか、個人の能力を決めてかかっているケースを見かけることがある。しかし本来、「できる」とか「できない」とかは教師や他の子どもとのかかわりの中で必然的に生じてくるものなのである。

つまり、やる気を持った子どもには、できる

できないにかかわらずどんどん新しい役割に挑戦させる。そして、それを教師や他の子ども達が暖かく見守り、支えていく。このような学級づくりの姿勢があれば自然に個と集団が成長し高まっていくのではないだろうか。

役割分担をして活動する際に大切なことは、お互いの助け合いを密にすることである。そのためには、役割分担はあくまで目標を達成するための手段であるということをも十分理解させる必要がある。皆んなで協力して目標を達成することの方が、価値が高いことを理解させれば、助け合いはごく自然な形で行われるものである。

一年間の諸行事・諸活動の中で見通しをもって、誰もがリーダーになれるような役割分担を考えたいものである。

(4) お互いが信頼し合える学級を日常活動の中で育てる。

○納豆のような学級を

私のかつての同僚が学級づくりについて、口ぐせのようにつぶやいていた言葉に、「大豆のような学級から納豆のような学級」をめざしたいという言葉がある。彼のこの言葉は、深い意味を持っており、今も強く心に残っている。

「大豆のような学級」とは、教室の中では(一定の枠の中)一見まとまりを保っているように見えても、それは外見上だけで、内面を探してみると、心は固く閉ざされており、教室という枠がとれてしまえば互いに無関心で反発し合っている状態をいう。教室は、40名の子どもを入れる単なる容器でしかないのである。もし、このような学級が存在するとしたら、何と味気ない学級生活になってしまうだろう。

学級という集団は、

(子ども) + (担任) = (学級集団)

でなければ一人ひとりの力は発揮できないのである。先にも述べたように、個性を生かす学級づくりとは、人とちがった子どもを育てることではないのである。

他者（自分をとりまく集団）と密接にかかわり合いながら、その中で、自分らしさを発揮できる子どもを育てることなのである。

（連帯感）＋（信頼感）の糸で結ばれた学級＝納豆のような学級であってこそ、自分の行動に勇気と自信が持て、自分の思っていることが本気で言え、自分なりの見方、考え方、感じ方の世界が広まるのである。

こういった立場から、納豆のような学級を育てることは、「個性豊かな子ども」を育てる学級づくりの基盤ともいえるものである。

○一人ひとりの心の記録を大切に

個性とは、究極的には一人ひとりの内面世界にかかわる問題である。子ども一人ひとりの内面（心）を育てるには、心の成長記録＝生活日記を書かせることも重要な教育活動である。

一日の生活を振り返り、今日の一日を自分はどうのように過ごしたか。どのような成果や問題点があったかなど、一日の生活の中で心の動きを記録しておくことは、自己をより高める上でも、また、感性豊かな心を育てる上でも大切な習慣である。

前任校⁽³⁾では、全生徒に「若い芽」という生活記録と日記を合わせたものを毎日書かせていた。

次に示すのは、中学3年生のA子、B男、C子、D子のある日の若い芽の内容である。

○ 今日放課後、ロードレースのための練習をした。毎日、少しずつではあるが秒が早くなっている。これも親友たちのおかげである。秒が早くなると、私も喜ぶとともに友達が喜んでくれる。走っているときは、“ここで少

し休んでやろうかな!?”と何度も思う。自分に負けそうになる。でも、走り終えた時、ほんとうにうれしい!走り終えた快感と喜びを分かち合える友がいるから……。 (A子)

○ 明日、教生の先生に「さようなら」を言わなければならない。でも、この「さようなら」は決して別れるだけの意味ではない。この「さようなら」には、「ありがとう」と「いい先生になって下さい」と、それと、「先生たちのことは絶対に忘れません」と、……たくさん、たくさんの気持ちをこめて、……「教生の先生さようなら」(B男)

○ 部活が終わった後、いつも反省してみる。「あそこの説明は、みんなにわかってもらえなかったかもしれない。あそこの説明はもっと短く説明できたはず。もっと、うまく、さっさと説明できたらいいのに……。」と毎日のように思う。部長になってもう3ヶ月以上経つのに……。もっと、しっかりした部長になりたいなあ。(C子)

○ 新聞に、老人ホームの火事のことが載っていた。消防士に救出される時、「この人を先に助けて!」と言われた老人のことが載っていた。生きるか、死ぬかのせとぎわで、私にも同じことがいえるだろうか。いや、言えない。私はとてもずるい人間だから。でも、私はあんな人になりたい。ギリギリの所に立たされても、ずるいことを考えない人に。(D子)

A子は、放課後のロードレースの練習における友情の美しさ、尊さを、B男は、お世話になった教育実習の先生たちに、精いっぱい感謝の気持ちを、また、C子は、部活動におけるキャプテンとしての苦悩と責任感を、そして、D子は、新聞記事を通して感動した心の葛藤を自分とのかかわりで素直に表現している。

いずれも短い文章の中に、自分らしさ、自分の心の動きが表現されている。心の記録を通して、人間性豊かな子どもに育てたいものである。日記を書くことは地味ではあるけれども「個性の伸長」に大きく関与している大切な教育活動であると考え。

4. おわりに

以上、「個性豊かな子どもを育てる」学級づくりについて、4つの柱をあげ、その視点について私見を述べてきた。しかし、学級担任という仕事は忙しい。一日の生活の中で、子ども一人ひとりと接し、心から話し合う時間はなかなかとれないのが現状である。

ともあれ、子ども達は担任の行動をよく観察している。担任の姿に学ぶとも言われる。そういった意味で、個性豊かな子どもを育てるためには、個性豊かな担任でありたいものである。個性豊かな担任であってこそ、個性豊かな子

も達が育つものと信じている。

最後に、調査に協力頂いた広島大学附属三原中学校の村上典章教諭に感謝の意を表したい。

《引用および参考文献》

- (1) 梶田叡一著「真の個性教育とは」13ページ
国土社 1987年
- (2) 広島大学附属三原中学校著「自己表現活動を生かす授業の創造」18ページ ぎょうせい
1983年
- (3) 広島大学附属三原中学校
 - 梶田叡一著「生き生きとした学校教育を創る」有斐閣 1982年
 - 片岡徳雄著「学習集団を創る」黎明書房
1980年
 - 初等教育資料、東洋館出版社 5月号
1989年
 - 初等教育資料、東洋館出版社 11月号
1989年